平成21年度秋季企画展

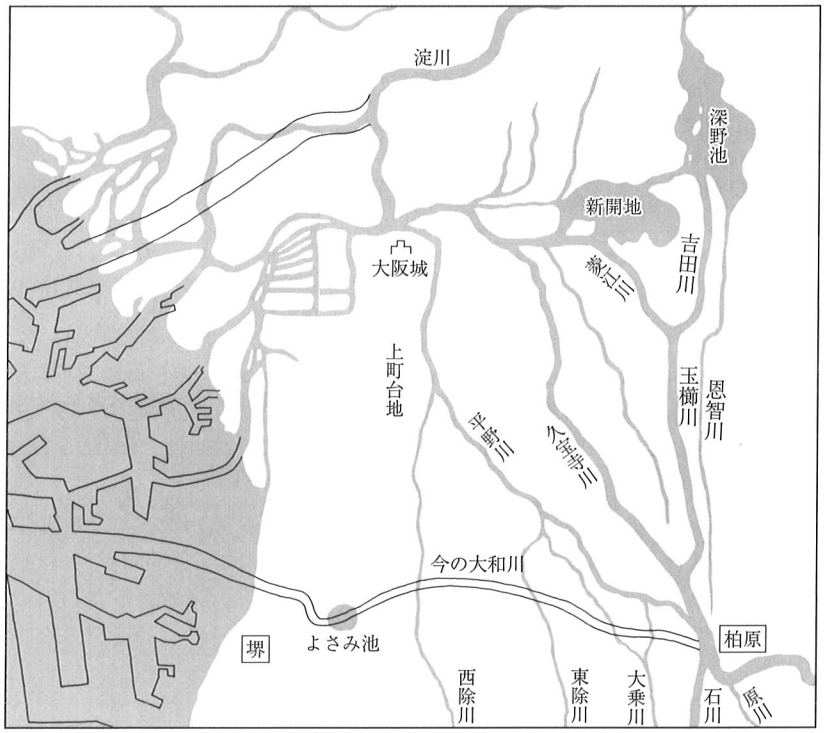
ふりかえれば大和川

ー大和川のつけかえ工事ー

柏原市立歴史資料館

大和川は、身近な川としてみなさんに親しまれています。水の汚さは全国でも１位、２位を争うほどですが、最近はどんどん水がきれいになり、たくさんの魚や虫もみかけられるようになってきました。

そんな大和川ですが、今のすがたになるまでには、いろいろな歴史がありました。ここでは、その中でももっとも大きなできごと、大和川のつけかえ工事を取り上げてみたいと思います。大和川の歴史をふりかえり、そして今も流れる大和川をふりかえってみましょう。



つけかえ前の大和川

つけかえまでの大和川

大和川は、何本かの川に分かれて、大阪平野を北または北西に流れていました。ところが、なだらかな平野を流れ、その先でもとの淀川（今の大川）に流れこんでいたため、水の流れが悪く、大雨になるとなんども洪水をおこしてきました。そして、人々は大和川をつけかえてほしいと願うようになりました。つけかえを求める運動を中心になって行っていた人たちのひとりが、中甚兵衛です。今回の展示では、この中甚兵衛が残したものを中心にならべています。

しかし、つけかえを求める人たちばかりではありませんでした。つけかえに反対する人たちもたくさんいたのです。どうして反対する人たちがいたのでしょうか。展示をみながら、よく考えてみてください。

～中甚兵衛の一生～

甚兵衛は、1639年（寛永16年）に、河内国河内郡今米村（今の東大阪市今米）で生まれました。14歳のときに、近くの吉田川の堤が切れる洪水を体験し、これが、その後の甚兵衛の人生に大きな影響を与えたのかもしれません。そして、18歳でお父さんが亡くなるという悲しい体験をしますが、その次の年に江戸（今の東京）へ行っています。それから34歳になるまで、16年ものあいだ甚兵衛は、江戸にいたようです。江戸で甚兵衛が何をしていたのかわかりませんが、そのあいだに、幕府（国の役所）によって、３回もつけかえが考えられていますので、つけかえ運動にもかかわっていたのでしょう。また、川のことや洪水のことを学んでいたのかもしれません。

今米村に帰った甚兵衛は、次の年に35歳で結婚しました。その次の年、河内では大洪水がおこり、大和川のつけかえを求める運動が大きくなりました。幕府もつけかえを考えるのですが、そのたびにつけかえに反対する人たちがいるため、つけかえは中止されました。水の流れをよくするための工事はなんどか行われたのですが、洪水はなくなるどころかひどくなっていきました。そして、1701年（元禄14年）ごろから、またつけかえが考えられるようになり、甚兵衛は幕府によびだされて、どうすれば洪水がなくなるかという考えを伝えたようです。

そして、とうとう1703年（元禄16年）につけかえが決定し、次の年に工事が行われました。甚兵衛も息子の九兵衛とともに、工事に協力しました。このとき、甚兵衛はすでに66歳になっていました。工事のあと、新田の開発などをしますが、すぐにお坊さんになっています。仕事を九兵衛にまかせてからの甚兵衛がどのような生活をしていたのかもよくわかっていません。そして、1730年（享保15年）に92歳で甚兵衛は亡くなりました。そのころとしては、信じられないような長生きでした。66歳でつけかえ工事に参加したくらいですから、甚兵衛は、とてもじょうぶな体と若々しい気持ちを持っている人だったのでしょう。

＊年齢は、数え年（生まれたときを１歳と数える）です。

中甚兵衛着用の鹿革陣羽織（中九兵衛氏所蔵、Ｎ－090612）
中甚兵衛が、つけかえ工事のときに着ていたと伝えられる陣羽織です。着物の上に着る上着で、鹿の革で作られています。

築留に立つ中甚兵衛の銅像

中甚兵衛肖像画（中九兵衛氏所蔵、Ｎ－090611）
中甚兵衛を描いた絵です。大和川のつけかえが行われた次の年、甚兵衛は67歳で出家しました。出家とは、僧（お坊さん）になることです。この絵は、出家後に描かれたもので、そのため頭の毛も剃っています。つけかえ前の洪水などで亡くなった人たちのために出家したのではないかと考えられています。甚兵衛は長生きし、92歳（満91歳）で亡くなっています。300年前としては、信じられないほどの長寿です。

つけかえ工事

1704年（元禄17年・宝永元年）に、とうとうつけかえ工事がはじまりました。２月にはじまった工事は、10月に終わっています。わずか８カ月で新しい大きな大和川が完成しました。川の幅が180m、長さ14.3km。毎日１万人以上の人がはたらき、７万両以上のお金がかかりました。１両は、今の20万円くらいと考えられ、そうすると今のお金で考えると140億円ほどのお金がかかったことになります。

工事は、できるだけ川の底を掘らず、どうしても掘らなければならないところで出た土を川の両側に堤防として積み上げて行われました。ムダのないように考えられたのです。そのために、工事の前に正確な測量をして、しっかりとした計画を立てていました。実際に工事の計画のとおりに堤防がつくられていたことが発掘調査で確かめられています。そのころの技術や知識は、今のわたしたちが想像するよりも、ずっと進んでいたようです。

つけかえ後の大和川

もとの大和川も川の幅が100～200m、場所によっては300mほどもありました。そして、つけかえ後は、小さな川だけ残し、もとの川原は田や畑として生まれ変わりました。これを新田といいます。新田では綿がたくさんつくられ、その綿や綿からつくった糸、布などが各地に売られました。河内でつくられた「河内木綿」は、そのころのブランドで、高いねだんで売れたようです。

しかし、新しい大和川の近くの人たちには、こまったことが次々とおこりました。大和川のつけかえに反対していた人たちです。つけかえ前に心配していたように、田畑を失った人、つけかえ後に洪水がおこるようになったところ、田畑に使う水にこまるようになったところ、村が川の北と南に分かれてしまったところなど、いろいろとこまったことがおこりました。

こうして300年前につくられた大和川は、今もゆうゆうと流れています。しかし、その大和川には、長い歴史があることを覚えておいてください。そして、大和川の自然や環境にも目を向け、わたしたちの大和川をたいせつに見守っていってください。

ふりかえれば、いつもそこに大和川が流れているはずです。

－同時開催－

金　勝男 写真展「大和川慕情」

写真家・金　勝男氏が撮影した大和川の写真を多数展示しています。

柏原市立歴史資料館

〒582-0015　大阪府柏原市高井田1598-1

TEL　072-976-3430

月曜休館、入館無料

・このリーフレットは、2009年９月22日から12月13日まで開催する秋季企画展「ふりかえれば大和川」に伴って作製したものです。

・展示に際して、中九兵衛氏、松永白洲記念館、金勝男氏の協力を得ました。